慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	W. ジェイムズ教育論の思想的基盤に関する研究 : 「経験」概念の検討を中心に
Sub Title	
Author	岸本, 智典(Kishimoto, Tomonori)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.78 (2014.) ,p.185- 188
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成25年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000078-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うに展開され，どのような効果があったのかを検討した。コア・ナレッジ・学校（Core Knowledge Schools：以下CK学校）と非CK学校間の比較，及び一つの学校を長期追跡することによって，比較的な手法で「文化的リテラシー」論におけるコア・ナレッジ（Core Knowledge）の効果を検証した。最終的にこの実践運用と理論展開の関係を中国での事例を考察することにより，「文化的リテラシー」論の研究において補強的な役割を果たした。

本研究は，二つの循環，すなわち「理論」と「実践」の循環，そして「理論」内部における「著者」「テクスト」「読者」の循環に着目して，ハーシュの理論展開を考察した。そこから，二つのことを明らかにした。まず，ハーシュによる「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論は単に分離したものではなく，両者の間には交差した部分も存在している。その交差している部分は，解釈の源流に遡ることで明確に確認出来る。この解釈を考察することによって，ハーシュの「文化的リテラシー」論の全体像をより明確にできた。

そして，循環構図によって，ハーシュの「文化的リテラシー」論における理論展開と実践運用の総合的な関係を明らかにした。さらに，この理論展開と実践運用における循環的な関係によって，そのプロセスにおける理論の消失と実践運用の徹底的ではない部分が見えた。この消失によって，今日までの分離した研究を形成してきたのを論証した。

注

1　アップルは自分が唯物論者・物質主義者の傾向があると自称し，社会現象学・ハーバーマス（Habermas）や，批判理論の混合したものから影響を受けたと述べた。（Apple, M. W., & Buras, K. L. (Eds.). (2006). *The Subaltern Speak: Curriculum, Power, and Educational Struggles*, New York, NY: Routledge.）

2　マイケル・W・アップル（著）；門倉正美・宮崎充保・植村高久（訳）(1986)『学校幻想とカリキュラム』東京：日本エディタースクール出版部，250。

W. ジェイムズ教育論の思想的基盤に関する研究

―「経験」概念の検討を中心に―

岸　本　智　典

1．研究の目的と意義

本研究の目的は，19世紀の後半から20世紀の初頭にかけて活動した哲学者，心理学者であるウィリアム・ジェイムズ（William James, 1842–1910）の哲学思想における中核的考えを，彼の教育論との関わりにおいて把握し，そのような彼の考えの持つ教育学的な意義を示すことである。そのためにも，本研究ではジェイムズが伝統的な経験論や従来の心理学に対して行った批判的営為を「経験」概念の再構成の営みであったと捉え，彼の「経験」概念の特質を明らかにすることを試みる。その際，彼の思想形成の動因となっていたと見受けられる「辺縁」への視点に着目し，その内実を明らかにすることを目指した。

本研究は教育学研究であるが，ウィリアム・ジェイムズという研究対象の性質上，哲学・心理学・生物学等にまたがる学際的な研究となり得る。「教育」という人間の，複雑かつ本質的な営みを理解する

ためにはこのような学際的な視点が不可欠であると考えられるが，それは本研究のようにテクスト解釈という方法を用いる際にも当てはまる。「教育」という領域横断的なテーマを，ジェイムズという領域横断的な人物の問題意識を通して理解しようと試みることは，現代の複雑さを増した教育問題への分析的視座を得るためにも有用であると考えられる。

2. 研究の内容と成果

筆者のこれまでの研究で，ジェイムズ教育論において彼の「自由意志」への信念が重要な位置を占めていること，また，そうしたことが彼に独自な進化論の受容の仕方と密接に結びついていることが明らかとなっている（岸本智典「W. ジェイムズの教育論とダーウィンの「変異」観念の受容―彼の子ども観と自由意志論に着目して―」『哲學』（慶應義塾大学三田哲学会），第131集，2013年3月，235–265頁）。彼の「経験」概念も，彼の「自由意志」への信念や進化論受容と関係していると考えられる。彼は「教えること」を「技芸」であるというが，彼が「教えること」を「技芸」であると言わねばならなかった理由と「経験」概念の再構成を行った理由は，従来の要素主義的な経験主義への不満という点で同じ根を持つと考えられる。本研究においてはこの点を特に検証したいと考えた。

最近ではジェイムズの「辺縁」への視点に着目し彼の哲学思想を分析する研究も増えてきている（例えば，Taylor, Eugene. *William James on Consciousness Beyond the Margin*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 1996. 等）。本研究ではそれらの先行研究に学びながら，ジェイムズの「経験」概念に着目し，その特質を明らかにすることを試みるとともに，そうした「経験」概念と彼の教育論との関連について考察を行った。その結果，彼の「経験」概念を明らかにするためには，彼の哲学である根本的経験論と深く関わりを持っていた「注意」概念を検討しなければいけないことが判った。さらに，彼の「注意」概念は「教えること」を「技芸」であるとした彼の教育論を支える論拠ともなっていたことが明らかとなった。以下の段落はその要旨である。

ジェイムズは1899年に『心理学についての教師への講話，並びにいくつかの生活理想についての学生への講話』（*Talks to Teachers on Psychology: and to Students on some of Life's Ideals*, 以下，『講話』と略述）という，教育論の書ともいえる著作を公刊したが，その著作の前半部において彼は「教えること」が「科学」からは直接そのプログラムを導き出し得ない「技芸」であると説いていた。先述のように発表者のこれまでの論考によれば，彼が「教えること」を「技芸」であると主張して譲らなかったのは，教える対象である子どもの「自由意志」を尊重していたからだと解釈することができるのであるが，問題となるのは，彼のその議論の中身である。ジェイムズ自身は『講話』のなかで自身は「自由意志」を信じる者であると明言するが，それは「注意する努力の量というものがあらかじめ決定されているということは決して客観的に証明できるものではない」と考えているからだと論じる（*Talks to Teachers on Psychology and to Students on Some of Life's Ideals*. Frederick Burkhardt (General Editor), *The Works of William James*, Cambridge, Massachusetts and London, England: Harvard University Press, 1983, pp. 111–2.）。つまり，ジェイムズにおいては，教育の対象となる子どもの自由な主体性が，「注意」の非決定性（注意の量の観察不可能性）に基づいて認められていたのである。ここにおいて，ジェイムズの教育論においても「注意」概念が重要な位置を占めていたことが確認される。ジェイムズにおいては教育の特殊性（教えることは「技芸」であるということ）を語る際，重要な概念として「注意」概念が用いられていた。注意の量は観察不可能なのだから非決定的であり，むしろそれは科

学の外（＝形而上学）の問題であると彼はみているのである。

また，彼が影響を与えたジョン・デューイやジェイムズの同時代人，先人たちとジェイムズが用いるボキャブラリーを比較検討することで（例えばHugo Münsterberg, *Psychology and the Teacher*, New York and London: D. Appleton and Company, 1920（originally published in 1909）.［以下，『心理学と教師』］等との比較検討），ジェイムズ教育論の特徴（可能性と限界）を浮かび上がらせたいと企図したが，ミュンスターベルクとの比較においてジェイムズはいわゆる「新教育」教育思想と同様に「子ども」の視点に立つ教育論を展開していたことが明らかとなった。以下にその要旨を記す。

『心理学と教師』においてミュンスターベルクは，「教えることの諸目的」を「生の諸理想」との関連で精査すべきであるとし，科学としての心理学の外側で哲学的，倫理学的に考察された「諸理想」に応じた「正しいガイダンス」を行うことを教師の仕事であるとしていた。これは，逆に言えば，「正しいガイダンス」の内容（すなわち「諸理想」）さえ明らかになれば教師は子どもに対して統制的に，科学であるところの心理学の知見を活かしながら，教えることを行ってもよいという考え方にもつながる立場である。そうした立場の前提には，「内側の実在」と「外側の実在」との間に線を引く二元論があったといえる。また，「意志による諸決定」の領域を独自に確保する思想的前提も指摘できる。

一方，そのようなミュンスターベルクの立場とは異なり，ジェイムズはあくまでも子どもの「自由意志」を尊重し，科学であるところの心理学の適用には限界があることをむしろ強調していた。その意味で，ジェイムズの教育論は「子ども」の視点に立ち，彼らが自由であることに優先権を持たせるものだったといえるだろう。対して，ミュンスターベルクの教育論は「教えることの諸目的」である「生の諸理想」の考察を教師たちや哲学者たちに委ね，そうした考察から導かれる「目的」をそのまま教育に適用することで教育がうまくいくと考えていたという点で，教育者の側に立った教育論であったといえるかもしれない。

ジェイムズの思想に対するこうした位置づけの仕方は先行研究において既になされているものに類するようにもみえる（例えば菅野文彦は，ジェイムズの思想のうちに「主客未分の「純粋経験」にたち返りつつ「可塑的な」世界へと能動的に働きかけることに道徳的な意義を見いだし，世界の側にもそれを保証するような属性（＝「世界の道徳性」）を展望する，といった基底的なモティーフ」を見い出し，それと「子どもの直接経験の重視，それを通した道徳的な性格形成の予定調和といった「新教育」的な発想」との間には重要な類縁性が見られるということを指摘し，ジェイムズを「新教育」思想史の中に位置づけている［菅野文彦「W・ジェイムズ心理学・倫理学の思想的基底と「新教育」」『日本デューイ学会紀要』第43号，2002年，146–153頁］）。しかしながら，ジェイムズの教育論・教育思想が「新教育」思想を越え出るポテンシャルを秘めていたかどうかについては今後検討しいていく必要がある。

3. 本研究課題に関する研究業績

岸本智典「W. ジェイムズ教育論の位置―H. ミュンスターベルク教育論との比較検討を通じて―」日本デューイ学会第57回大会（於：新潟青陵大学，新潟），2013年9月。

岸本智典「W. ジェイムズ教育論における「関心」と「注意」」教育哲学会第56回大会（於：神戸親和女子大学，兵庫），2013年10月。

KISHIMOTO, Tomonori, “W. James’ Conception of “Attention”: Why Teaching Should Be Thought of as An Art,” Waza gengo: mente, corpo, conoscenza e relazione educative: Scambi fra tradizioni d’Ori-

ente ed esperienze innovative d'Occidente, The Department of the Education Sciences, University of Bologna, Italy, November 2013.（国際セミナー　わざ言語：思考と身体，知と教育における関係性の再考―東洋の伝統と西洋の先進的取り組みの経験をふまえて―［科学研究費基盤研究（B）比喩的な指導言語による感覚の共有と「わざ」の学びモデルの構築（研究代表：生田久美子，田園調布学園大学）］，メインセミナー発表者：Laura Cavana・Rita Casadei（Università di Bologna），生田久美子・安村清美・中原篤徳（田園調布学園大学），中西紗織（北海道教育大学釧路校），若手セミナー発表者：Giovannni Giuseppe Nicosia（Docente di matematica, IIS Serpieri, Bologna），Massimiliano Gallo（Docente di filosofia, Liceo delle scienze umane V. Carducci di Forlimpopoli），室井麗子（岩手大学），尾崎博美（新渡戸文化短期大学），畠山大（作新学院大学），岸本智典（慶應義塾大学・院生），高橋春菜（東北大学・院生））

大学における「ラーニング・コミュニティ」の思想史的研究

間　篠　剛　留

1．本研究の課題

現在米国において「ラーニング・コミュニティ」（以下「LC」と略）という大学改革の方法が注目を集めている。これは，複数の科目を結びつけることにより大学で学ぶ知識にまとまりを与え，学生を共通の仲間関係の中に巻き込もうとするものである。LCは大学におけるラーニング（学び・学術）を問い直す可能性を秘めたものとして注目に値するが，現時点でのLC論は学生のリテンション（継続在籍）向上や学びの質向上のための方策としてLCを捉える傾向が強い。LCの実践家の中には，LCの取り組みがアカデミックな目標に向かっていないのではないかという懸念もある。また，LCに関する議論においては，種々の概念について十分な検討が行われていない。重要な概念であるはずの「ラーニング」や「コミュニティ」が，曖昧なままに用いられている。このような状況では，「ラーニング・コミュニティ」は単なるカリキュラム改革の道具に留まってしまう，あるいは単なるスローガンと化してしまうということになりかねない。

そこで本研究では，LC論の基盤となる思想を歴史的に遡り，各論者の議論の独自性を明らかにしながら，アメリカ高等教育においてLCの主張がどのような意味を持ってきたのかを思想史的に考察する。「ラーニング」に代表される大学における知的営為とコミュニティとの関係を，各論者は，それぞれの時代状況の中でどのように考えてきたのか。この問いを検討することは，LC論の範囲に限って大学を論ずるに留まらない。LC論の範囲にはおさまらないコミュニティやラーニングを検討することで，大学のあり方をより大きな範囲で検討し直すきっかけともなろう。本研究では特に，LCの取り組みの始祖とされるアレクサンダー・ミクルジョン，第二次世界大戦後にLCの実験的取り組みを行ったマーヴィン・キャドワラダーの二人の人物の思想，及び，現代LC論の動向について検討を行う。